

・横大路と推古 21 年の大道

古代、大和盆地の東西を繋ぐ大道があった。東の端は山辺の道と交わるあたり、西は竹内街道と大坂路の分岐点、今の長尾神社のあたりで、全長 12.7 ㎞、ほとんど平坦な直線道で、いつの頃からか『横大路』と呼ばれるようになった。



この道は古代の大和王権が本拠地とした盆地東南部の磯城、磐余しき いわれに続く道で、いわば大和王権を象徴する道とも考えられる。道の両端には海石榴市のチマタつばいち(衢、巷、街)と當麻のチマタがあり、人と物が行き交った。チマタは道と道が行き合うところ、神の居場所、人々が集まり、市が立ち、歌垣の場所で、チマタとチマタを繋ぐために大道は開かれたのである。

「難波より京に至るまでに大道を置く」

日本書紀の推古天皇 21 年 (613) の記事で、当時は遣隋使の時代。推古 16 年には隋の使者、裴世清はいせいせいの一行を迎えるために難波津に迎賓館を設け一行をもてなしたという記事が見えるが、難波津から天皇の居る飛鳥の都への道が、国の道として整備されたと宣言したのである。

この大道は横大路 - 當麻道たいまみち たじひみち - 丹比道 (竹内街道) - 難波大路のことだといわれる。飛鳥と河内を結ぶ道は、竹内峠を越える道以外に、大和川沿いの龍田道、二上山の北の穴虫峠を抜ける大坂路などがあるが、どれも史書に見える古からの主要な道であることは間違いがない。

ではなぜ竹内峠越えの道が「推古 21 年の大道」なのかということだが、この道が河内の磯長谷 (今の太子町) を辿り、古市から百舌の陵墓地を通る道だったからであろう。時の王家にとって敏達や用明天皇の陵墓のある磯長谷は特別の地であり、巨大古墳の続くこの道は大和王権の後継者には特別な道だった筈である。

というわけで、竹内街道沿いの市町村では平成 25 年に「竹内街道 1400 年」ということで様々なイベントを行った。それはそれで悪くはない。

ところが、推古 21 年の大道は、「横大路 竹内街道」ではないという先生も居られる。例えば今年 2 月にポコアで訪れた柏原歴史資料館長の安村先生は、『大和川沿いの龍田道こそが推古 21 年の大道』と主張されている。実は 2 月に柏原に行った時はこの安村先生説に共感していたが、今回は高田、本日のところは「横大路 - 竹内街道」こそが本命とってしまうのですが、どうでしょう。

・泊瀬街道と長谷本寺

寺伝によると長谷本寺の開山は710年、南都の高僧であった大満上人とされる。

藤原時代の等身の仏像、本尊の木造十一面観世音菩薩立像と木造毘沙門天立像（共に奈良県指定文化財）、木造伝薬師如来坐像が秀作であり、奈良県中南部に残る仏像群として大変貴重である。



かつて長谷本寺は「橋本寺」と呼ばれていた。建久4年（1193）の絵図には橋本寺が描かれているから、鎌倉のはじめにはそのように呼ばれていた。

橋本寺は「はしほんじ」であろうか。絵図は談山神社所蔵の「大和国磯野荘差図」と呼ばれるもので、横大路が旧高田川を渡る橋の傍に描かれており、それが寺の名になったと想像できる。古代や中世では人の行き交う場所に橋を架けることは僧侶の利他業の一つだった。その寺がいつのころか「長谷本寺」と呼ばれるようになったのは、その門前の街道と関係する。

平安時代の中ごろから長谷寺信仰が人々に流布し、横大路は中世から近世にかけては、長谷寺への参詣道としての性格を色濃く帯びるようになった。長谷寺は西国33カ所の札所でもあり、近くには岡寺、壺坂寺もあって、観音信仰霊場めぐりの人々が、西の山向こうから竹内峠を越えてやってきた。

磯野荘指図には高田川の大橋のたもとに、字「市河原」「東市河原」という地名が見えるが、大橋のたもとの河原で定期的に市の立つことがあったのだろう。中世、たぶん鎌倉の頃には横大路は泊瀬街道と呼ばれるようになり、高田はこの巡礼途上の一駅であって、庶民の宿泊所や貴人を接待する寺院、長谷本寺があり、街道には市が出来て人々が集まり、賑わうようになっていたのである。

この泊瀬街道にひとつの物語が生まれる。「**中将姫伝説**」。

この話は當麻寺に伝わる当麻曼荼羅の由緒譚で、継母に苛められる一人の姫が幾つかの不幸な出来事の後、世をはかなんで當麻寺で仏の道に入り當麻曼荼羅を織り上げ、観音に導かれ西方浄土に極楽往生するという話。おそらくは當麻寺の曼荼羅信仰を広めるために作られた物語だろう。

注目されるのは、物語で中将姫は子宝に恵まれない両親が長谷寺観音を深く信仰してその功德で生まれたと語られること。姫の生誕には長谷寺が関わり、その往生には當麻寺が関わっているのである。當麻寺から長谷寺へ、泊瀬街道で結ばれた両寺に繋がる中将姫の伝説は、両寺を結ぶ泊瀬街道を歩く人々によって語られ、伝えられ、広められてきたのであろうか。

・伊勢街道とおかげ参り

古代に開かれた横大路は、中世以降は、長谷寺や西国参りの人々の往来で賑わうが、江戸時代には伊勢参りが盛んになり、なかでもおかげ参りの折の街道沿いでは、食事や湯茶の接待などの「施行」を行ったといわれる。高田の町中の伊勢街道沿いには幾つかの太神宮燈籠やおかげ灯籠が残されているが、旭北町の高燈籠はその代表的なものである。



また、石園座^{いわそのにいますた くむしたま}多久虫玉神社（龍王宮）には、文政13年（1830年）に奉納されたおかげ参りの絵馬（1990年焼失、現在のものは複製品）が残されており、当時の「おかげ参り」の様子を知ることが出来る。

伊勢への参宮は室町時代には農民を含めた上下の階層におよび、江戸時代以降には「一生一度の伊勢参り」と称されるほどの行事として定着した。

この風習を広めたのは「御師（おし、おんし）」と呼ばれる神人たちで、彼らは全国を巡り、神宮の神徳を説き、御札を配り、参宮者の宿泊の便宜をはかるなど、人々に伊勢信仰の布教と参宮の勧誘を行なった。

伊勢神宮の門前町の宇治・山田には、妓楼や料理店が軒を連ね、芝居・浄瑠璃・見世物などの小屋が掛けられ一大遊興街が形成された。伊勢参りは、信仰と観光がセットになって、人々を旅の夢に誘ったのである。

「おかげ参り」はこの庶民の一生に一度は伊勢参宮を果たしたいという願望が、突発的な大量集団参宮という現象となって現れたもので、江戸時代を通じて合計15回発生した。特に明和8年（1771）には200万人以上、文政13年（1830）には500万人以上もの人々が伊勢を目指したといわれる。

参加者の中には子供や女性、奉公人や貧者など通常は旅をすることが難しい人々も含まれ、沿道ではこれらの人々に食物などを提供する施行が行なわれた。

お陰参り、それは「お蔭さまで生かされている」という伊勢信仰の最も基本的な大神様への感謝の気持ちの体现で、高田に残されている絵馬や燈籠は、その民衆の心の記念物なのである。

（参考資料）

横大路（初瀬道） 奈良県文化財調査報、奈良県教育委員会

竹内街道（二上山麓の道） 同上

街道の日本史34 奈良と伊勢街道 吉川弘文館

インターネット

